

合理主義の立場

加藤 正

前 言

今は啓示の時代とでもいうのであろう。理性の判定を乗り越えて、啓示の眩惑が吾人を捉とらえているように見える。しかしこの動きの裏に理性の更生、合理主義の新時代の誕生の、意義と条件とを見出すことができなければならぬ。理性がどんな姿で、どんな使命をもつて更生してくるかの問題は、蓋けだし現下の哲学の一課題たるを失わない。私は現在理性の意義や合理的科学的精神のために努力を致されつつある諸先輩に敬意を表せざるを得ないが、また同時にその人々の方向が果して知性の本然に沿うものであるかという点に多少の疑問なしとしない。

左の摘要は、とてもそれらに対する批評というようなものではないが、合理的科学的精神の問題の立て方に資するところがあれば幸である。なお私にこの摘要を書下す感興を与えてくれたのは船山君の「合理主義への反省」(『知性』)であった。左の摘要中に間々同君を引合いに出したのはそのためである。

一

合理主義とは、課せられた問題の解決を理性において求めんとする立場を指す。合理主義は本来それ以外のことを意味しない。合理的なもの、理性的なもの、科学的理論的なもの、論理的なもの、そういうものの価値を認める

か否かではなく、そういうものの中に解決を求めるか否かが合理主義を非合理主義から分つ根本的徴表である。

説明。従つて科学的合理的なもの、理論的知識、論理的認識、そういうものの意義と必要の熱烈な擁護者であり、更にはそういうものの実際の展開者であつても、彼が非合理主義者——純粹の非合理主義者たることに矛盾しない。この擁護、この展開を最後まで推進おしすすめて、結局一切の問題の解決をこの理性において導かんとするときのみ、彼は合理主義者である。

また非合理的なもの、反理性的なもの、感情、想像、欲望、意志、信仰、そういうものの意義と役割、必要と必然とを認めることは合理主義者としての立場に矛盾しない。そういうものに解決を求めんとするときのみ彼は非合理主義者である。しかし、もし彼がそういうものをただ問題が提起され引出される形態にすぎないものと見、これらを理性に止揚しやうすることによつて、そこから解決を導かんとするならば、彼は合理主義——純粹に合理主義の立場におるのである。

二

合理主義か非合理主義かの問題の核心は従つて次の点にある。理性が決定的であるか、決定的なものは他にあるか。合理的なものの根底に非合理的なものがあるのか、非合理的なものの根底に合理的なものがあるのか。合理的なものそれぞれ自身で解決の体をなすか、それともそれ以外のものによつて基礎づけられることを要するか。合理的なものそれぞれ自身一つの極点を表すか、それともより以上のものに高められることを要するか。これ以外の仕方では合理主義の問題を立てる者は、ただ混乱を求めるものである。

説明。合理主義と非合理主義、主知主義と反主知主義をめぐる一切の問題は結局この問題に還元される。ここにはただ二様の解答しかない。人は合理主義か、然しからずば非合理主義の立場に立ち得るのみである。この対立を越え

た第三の立場なるものはあり得ない。非合理主義を否定的に媒介する絶対合理主義の定立によつて右の対立を出たと考えることも理由がない。それは合理主義を否定的に媒介する絶対非合理主義の定立をもつてその対立を出たと考えることと相表裏した誤解であつて、この種の思考は、合理主義と非合理主義、合理的と非合理的との相関的対立においていづれが根本的であり、決定的であるかという問題の中に既に含まれている。いづれの立場もそれ自身としてあるのではなく、それぞれに対立的立場を否定的に媒介して立っているのである。

三

合理主義および非合理主義は現実に、対する、二つの立場である。換言すれば、現実を限定する立場において合理主義、非合理主義の対立が現われる。従つて現実の中においてはこの対立自身が止揚しやうされ意味を失う。現実が合理的であるとともに、非合理的でもある。もっと正確に言えば、合理的でもなく、非合理的でもない。そんな範疇はんちゆうには入れ得ない。合理的に割り切れないと同時に非合理的なものとして決着をつけることもできない。現実がかかる限定以前の事実、かかる範疇はんちゆうの外なる事実である。現実が合理的な限定によつても、非合理的な限定によつても動くのではない。現実には二つの立場、二つの限定の対立を越えたところから生れ出で、それを越えて動いている。

説明。合理的な現実とか非合理的な現実という言葉は、科学的な表現ではない。批判的に反省すれば、このときにはただ合理的立場もしくは非合理的立場から限定され規制された現実があるばかりである。現実の限定としてのこの立場があるばかりである。現実そのものはこの立場を越えてある。だから例えば船山君が「現在、世界が、東洋が、日本が置かれている状態がそのまま合理的であるとは何人も考えまい」といい、「現実の事態は合理主義を尻目にかけて驀進きようしんしている」といい、「厳然たる非合理的現実」というのは、実は現実ではなくて、現実を限定し、表示し、嚮導きやうどうし、統制しつつある一定の立場を考えているのである。現実そのものはかかる立場を越えた運動

である。現実の上に合理的な——または非合理的な立場が定立されると、現実はその中に消える代りに、その定立の外においてそれに対立する非合理的——または合理的な立場を開き出す。かくて現実はかかる対立として現れる。現実の展開はこの対立を絶えず自己の中に解消しては相の変った新しい対立を生み出す。従つて、第一に、現実を合理と非合理の相関の中に見ず、一つの非合理的なものにおいてのみ見ることは間違つてゐる。第二に、この相関は、その対立の中を通じて一つの現実が動いている相関であつて、「非合理的な現実」と「合理的な現実」との対立ではない。現実においては現実の単なる展開——自己に対して置かれた限定を絶えず自己の中から太り越し脱ぎ捨てて行く展開——があるばかりである。現在の事態はそれ自身としては合理的でもなければ非合理的でもない。と同時に自己の上に自己の述語として合理的立場をも非合理的立場をも均しく立てることが出来る。現在の事態をして「非合理的現実」なるかのような様相を呈せしめている一部の政治的非合理主義や教育学的非合理主義にしても、また田辺博士から船山君に到る科学的合理的知性の擁護の哲学にしても、その他現実の合理的解決を策する各種のブレントラスト的為政者の努力にしても、みな均しく現在の発展日本という現実を限定して、その上に立とうとしているのである。ただその現実に対してお互に何程かず違つた立場を取りつつ、並行したり、対立したりしているだけである。しかも現実そのものは吾々がお互に発展日本という形で了解し合つてゐるものよりも遙かに広大深遠で、あらゆる立場からする發展相の限定、把握に対し、それに並行し、それを越え、それに対立する各種各様の合理的立場を開き出しつつあるのである。

四

合理主義と非合理主義の対立を越えること、この二者を統一し綜合することは、ただその両者の現実そのものへの止揚（もしくは現実への解消）においてのみ達し得る。しかし現実は限定することなしにこれを捉えることはでき

ない。吾々は現実を限定することなしに現実の上に立つことはできない。限定されない現実そのものは吾々にとつては無縁な存在であり、無である。限定なき現実においては、「吾々」という限定もない——吾々が無である。

説明。現実は無限定される限りは理性的にか、超または非理性的に限定される。限定なき現実は無限定によつて捉えらる吾々（現実に対する立場）と、捉えられる現実との相関的対立となる。

捉えられる現実は無限定された現実ではない。消極的に限定されているのみで、積極的な限定ではない。即ち捉えらる吾々の立場——吾々の限定して持つている現実の限界が明かにされるとき、そこに限定以前、限定以上の現実が捉えらるべく開かれるのである。即ちこれは限定によつて媒介された無限定的な現実である。いわば、消極的に、限定を介して間接に捉えられた、従つて未だ直接に捉えられてはいない無限的現実である。それは、その限りでは、吾々の立場とはなり得ないものである。かかる限定なき現実の一つの全体と呼ぶこともできよう。しかしこの全体は吾々の立場とはなり得ない。また一方合理的立場と、他方非合理的立場とを止揚し超克したある絶対的な何ものかを与えることは、実際は右の消極的、間接的な無限定の現実を与えることに外ならず、その実は何の立場をも与えないことである。吾々はこういうものに帰入したり立脚したりはできない。これが吾々の立脚し得る主体たるためには、更に積極的、直接的なものとしての限定に転化されねばならず、その限り合理的、非合理的のいずれかとして限定される。積極的な限定は常に有限的限定である。積極的に限定された全体は、国家であつたり、種族であつたり、国家を越えた東亜共同体であつたり、そうでなくとも有限的属性における神であつたり、いずれにせよ自己の中に限界——否定的契機を含む有限性であり、より高い立場が開き出されることによつて越えられることを予想するものである。

無限者、全体者、絶対者は吾々の限定的立場を介して間接的に与えられるものであり、吾々の限定的立場の中に含まれている限界に外ならない。これから持つまでもなく既に持つているものである。従つて吾々は自己の限界を

自覚することにおいて今の立場で既にこの絶対者乃至は神の中に安住し歸入ないししているのである。だがそれにも拘かわらず更に吾々が自己の限定的立場を越えて無限者の中へ入るということは、吾々がそこへ歸入し安住するのではなく、吾々が吾々として消滅し無に歸することを意味する。しかし吾々がそこに歸入し、そこに蘇なまえるところが消極的、間接的の無限定者でなく、眞の積極的、直接的なものであるならば、それは既に生の限定なき絶対現実ということが新なものではなくて、一つの限定されたものになっているのである。既ち一つの限定的立場の限界を越えることが新しく限定された立場を開くことになっているのである。かくて吾々の立場は常に限定から限定への進行である。限定以前の現実の回復、相対立する立場の超克は、絶対的なるものを開くことにおいてではなく、新しい限定においてのみ行われ得る。

五

合理的なものも非合理的なものも、それが現実の限定である限りは積極的なもの、実証的、肯定的なものであり、また現実的である。だが合理的なものは現実の对象的限定、对象的に限定された現実である。非合理的なものは非对象的限定である。前者は客観的限定、客観的なものであり、後者は主観的限定、主観的なものである。前者は外官、外的経験、物的なものにおける現実であり、後者は内官、内的経験、心的なものにおける現実である。

現実の限定はこの両者の相関において与えられ、この相関において合理的なものは非合理的なものに対して決定的、根本的である。

説明。前節において、限定なき現実としての存在は限定によって現実を捉とらえる吾々と、捉とらえられる現実との相関的対立となることが立言された。だがこのとき、この限定以外に限定はなく、従つてこの限定の外に吾々の持つ対象的現実なく、この限定の外に「吾々」なるものもない。この限定において対象があり、吾々がある。この限定が

対象であり、吾々である。主観と客観はこの限定において一つである。しかし客観と一つでないところの、主観「吾々」の内部において現あらわされるところの限定がある。これが非合理的なものである。

さて、対象が限定されると、限定以前の無限定的存在はそこから排除され、無の中に没している。しかしこれはその限定と無関係に立たされるのではなく、その限定と相関的にある。だがこの存在はその限定の彼方において客観の奥に没しているのか、此方において主観の中に没しているのか、双方に対立的に沈んでいるのか、双方の奥に考えられていながら実は一つの同じものであるのか、そういうことは何等立言できない。そのいずれかとして限定されれば、限定前の存在はそこから排除されている。いずれにしろ、ともかく対象的限定から排除されている存在の運動が、主観の内部に開き出されるとき、その開き出された限定が非合理的なものである。かくて主観は対象的、客観的、合理的限定においてとともに非合理的な限定においても開き出される。しかしこの非合理的なものは、それが開かれることによって対象的な限定を止揚しやうしない。だが対象的限定と相関に立つ存在の運動が対象の中へ開き出せば、それは止揚しやうされて、自らと一つである新しい主観を伴うところの、新しい客観の限定となる。かくて合理的なものとは非合理的なものとの相関的対立において存在は実現し、現実として運動する。合理的なもの形式は概念であり、主観と客観との一致である。非合理的なもの形式は感情、情緒、想像（構想力）、欲望、意志、信仰等であり、主観と客観との差異である。

これによって、非合理的なものは合理的なもの限定を媒介として開かれるといえよう。ここでは合理的なものは直接的であり、非合理的なものは媒介的、間接的で、合理的限定が置かれるときそれに即してのみ開き出されるものであり、合理的なものはそれ自身で考え得るが、非合理的なものは対象的なものを左右せず、それにおいてのみ随伴的に考え得ると言える。

しかし他方からいえば、非合理的なものはむしろ合理的なものに対して決定的、根本的である。何となれば、そ

これは合理的限定を越えたもの、その下に隠されてあるものの開現と考えられるからである。即ち非合理的なものは合理的なものの精神であり、核心であり、根底であり、内的生命であると表象される。——だが、非合理的なものは合理的なものの限界を越えた存在、その奥にあるものではなく、かかるものの一つの限定たるにすぎないものである。この限定が開き置かれるところには、限定前の、限定を越えた存在は疎外され、無に没している。従ってかかる絶対的存在が非合理的なものにおいてのみ根本的、本来的な表現に達すると言い得る理由はない。かかる存在は、非合理的なものとしても、合理的なものとしても現し得ない。と同時にそのいずれをもつと象徴させることもできる。宇宙と呼び、大自然と呼ぼうとも本願と見、宇宙意志と見ようとも、何かの役には立つかも知れない。が、そのいずれも合理或いは非合理に即して開かれた一限定にすぎない。無限な絶対存在をとるまでもなく、個人、民族、階級、国家、人類の如き有限的存在すら、これを客観的对象的に措定するのと、主観的なもの、感情、想像、希求、創意において生成しつつあるものとして措定するのと、いずれが根本的に措定されるかを言い得る理由はない。現実の存在は、合理と非合理の相関において実現するが、それ自身は合理的でもなければ、非合理的でもない。

合理と非合理は相関においてある。合理の限界は非合理であり、非合理の限界は合理である。ところで今この相関を考えると、非合理的なものはその展開の限界において对象的なものを開くが、その際この对象的なものが開き出されるに依じて、非合理的なものはその中へ解消し、止揚される。非合理的なものはまた常にそこにおいて自らが開き出されるところの、对象的、客観的、合理的なものをもつ。しかし合理的なものはそこにおいて非合理的なものが開かれても、その中へは解消されないでそのままに残る。ここに合理と非合理の相関における合理的なものの特徴づけられる。合理的なものの諸限界において開き出される非合理的なものは、その展開の限界において新しい対象が開かるべきことを要求する。がしかし、現実になんか開かれるか否かは保証されていない。それは現実そのものの中に根拠があるのだ。对象的現実的なもの、客観的なものが新しく開かれなければ、非合理的な

ものはそれを開き出した合理的なものとともに残る。そして別の新しい現実が展開してそれらを過去のものとして置き去り、遠い記憶の中に没せしめ、非現実化した後まで残る。しかし、もし非合理の限界において、その要請する客観が開かれ得たならば、非合理的なものがその新しい客観的合理的なものの中に解消されるのみならず、自己の限界においてその非合理を開き出した始めの合理的なものもその中に止揚しやうされる。これらのことから、次のように言える。合理的な限定は、現実の一限定として、自己の中に越えらるべき限界をもつが、この限界において開かれるものは一方において非合理的なもの、他方においてこの限界を止揚しやうする新しい合理的なものである。この限界を一つの解決を要する問題と見れば、非合理的なものは問題を解決せず、単にそれを開き立てるにすぎない。それはただ合理的なものの展開においてのみ解決され止揚しやうされる。従って合理と非合理との相関において、合理的なものは常に非合理的なものを制約し、かつその帰趨を示すと言える。この両者のいずれが現実により深く喰入くひり、それをより根本的に開示するかということは無意味な問である。しかし両者の相関において決定的、基準的、足場的なのは合理的な限定である。

註。

以上の分析を模型によって示すことができる。即ち相互制約にある思惟と存在とを表象すると、その相互制約において成立つもの、その界面において展開するものを存在の根拠から開き置かれたものと考えれば、それが現実である。現実を開き出す存在の根拠は、思惟に対しては常に無の中に隠されている。それを神、自己原因、能産的自然といっても、それは合理的或いは非合理的に限定されたものに擬みなえて思惟が自己の中に作り立てたものに他ならず、何等存在の根拠が現あわされたのではない。一般に思惟の自己限定による展開が観念論、存在の限定（反映）による展開が唯物論とされる。従ってこの模型では、思惟の内部に置かれた規定が抽象的、非現実的、観念論的なもの、思惟の存在に接する面において措定そていされる規定が具象的、現実的、唯物論的なもの

(存在のありのままの把握) といふことになる。

存在は上の如くそれ自身としては無の中に隠されているが、模型としては現し置かねばならず、置く以上はすべてを客観性において抽象し対象化する模型の性質上、存在もまた対象性において現され、物的感性的として客観的に措定される。従つてこの模型では、存在との界面に措定される思惟規定は唯物論的なるのみならず、合理的、客観的となり、非合理的、主観的なものをこの模型で示すのには一工夫を要する。それで結局物的な存在、即ち合理性(対象性、客観性)において措定された存在を一方にとり、他方に思惟を置き、両者の境において思惟の上に(その限界として)開かれるものを合理的なものと表象する。それは第一次的には直観的知覚である。これは思惟の限界の向うに隠されている存在の述語概念である。これを媒介として主語たる存在が自己の述語の述語として開き出されると、判断が成立つ。この判断を媒介として新しい判断が開き出されると、推理が成立つ。かかる論理的仕方では合理的なものでは対象的に開かれて行く。開かれたものが思惟の存在に接する限界を現さなければ、それは抽象的、非現実的、観念論的であり、思惟の中に思惟の自己限定からつくられた対象である。非合理的なものは、直観的知覚を媒介として、思惟の中に開かれ、その展開の過程において、自己の相対的限界を対象的なものとして現しつつ、直観的知覚の新しい展開の中へ帰入する。非合理的なものは思惟の内包をなすもの、心、精神であるといえる。それは知覚から、合理的なものの展開に垂直に感受、感情、情緒、美学的なものとして開き、想像、信仰、意欲等に転化して再び対象知覚へ帰る循環である。この循環の過程に措定される観念論的对象はそれ自身また非合理的なものの観念論的、抽象的、非現実的循環を生ぜしめる。そして以上一切の思惟的過程が存在と相関的に置かれ、その交互制約の中に現実が開かれて行く。

この模型(甲)は一つの欠点を持つ。それは、非合理的なものの展開が宙に表象され、何等かの存在の限定として示されていない点である。そこでコギト(吾思惟す)を述語として持つスム(吾存在す)、即ち自己

を開くことが思惟^{しゆい}することであるような思惟の根拠、思惟の主体が措定^{そてい}される。即ち個人、社会、民族、人類等が一人称主体として置かれる。非合理的なものの展開はこの主体的存在の運動——実践の限定、反映である。この模型（乙）では存在の直接的第一次限定が主観的、非合理的、心的なものであり、客観对象的、合理的なもの、非合理的なものに媒介され、その周辺において開かれるものということになる。客観的な対象認識はこの主体的存在、その実践に媒介されて開かれるのであって、この媒介なしに考える者は思惟が自己の主体を離れて一人歩きすることを考える抽象的な観念論者ということになる。更に進んでは、対象世界なるものは一人称主体の周辺が疎外され客観化されたもので、その主体を離れて独立の存在をもつものではないと見る。たとえ独立の存在を認めても、それは同時に吾々とも独立と見、吾々が一人称存在としてこちらから働きかけなければ、その存在（の中に眠っているもの）は現実に関き出されないと見る。かくて与えられた存在をかかるとして写すことに対し、非合理的なもの、実践、活動、創造、作る働き、形象化する働き、しかも一人称的のそれが中心的意義を持つことになり、写すこともまた形作ることであり、見ることは実は働くことだとされる。主観的存在の実践が客観的存在に制約されていることを認める者も、その制約の内部、もしくははその制約の上に、主観的存在の自由創造的働きの固有な範囲が保有さるべきだとする。かくてこの模型乙によつて考える者は、合理的なものの展開即ち論理は、非合理的なものの展開即ち心的なもの（意欲、利害感、本能等）に依存し、決定されると説く。その意義を自覚しない論理は抽象的、非現実的であり、その主体たる存在にとつて無価値、否不合理なものとなる。

甲乙二つの模型の欠点を補つて、第三の模型丙を置くことができる。甲の存在が思惟の上に開かれるのは乙の一人称存在の活動によるとはいへ、後者はかかるものとして措定^{そてい}されたとき、既にコギトーの対象として客観的限定の下に展開さるべく置かれたのであり、その客観的活動をコギトーに関き表すことが問題となる。二

つの存在は相互に移行する關係に置かれてゐるのだ。客觀の奥なる存在は自らを限定して主觀の奥なる存在に開くのであり、コギトーのあらゆる形態にその開展が内在するとすれば、主觀的非合理的な自由創造的、意欲的限定は、これをその俚まに客觀的合理的な自然必然的、推論的限定で表し得、しかも後者で表し得ないものは如何なるものも前者によつて開き出す訳にはゆかない。更に、客觀的限定も思惟における限定である以上、そこには存在の思惟主体への自己限定が内在しており、従つて客觀的限定で表し得るものは總すべて主觀的にも開き得る。だが他方思惟主体は自己の限界を止揚しやうして存在へ移行しつつあり、かつ存在の自己限定は常にコギトーの主体たるスムに開くとは限らず、他のスム、即ち他人称の思惟主体にも開くのである。それで客觀的に限定されゆくものが主觀的限定に表現された場合は、コギトー、コギタームス（吾、吾々思惟す）となるとは限らない。コギタース（汝思惟す）にもコギタト（彼思惟す）にも、その複數にもなるのである。一つの主觀を他の主觀に媒介するものは、従つて客觀的合理的な限定である。

この模型はまず当面の用を果すかも知れない。しかし以上三種の模型の欠点は、元來現あらわし得ない筈の存在を、思惟の奥、即ち思惟において合理的、非合理的に限定された存在の奥に表象しようとしたことにある。客觀の奥なる存在も、主觀の奥なる存在も、その相関も、実はただ限定された存在から抽象して措定そていした思惟像にすぎず、従つて限定されているもの自身の方が根源的なのである。吾々は存在の模型を捨てて、互に他を媒介しつつ思惟的に限定されゆく合理と非合理との相関図自体によつて問題を考える必要がある。この相関の奥において存在がどうなつてゐるかを考える根拠はない。存在の客觀的合理的限定は、相連関して時代から時代へ、場所から場所へと開かれて行く。如何なる主觀的根拠もそれを左右し得ない。それを左右することは、自己をそれから（従つてまた存在から）疎外し、やがて閉塞へいそくすることを意味する。この限定の一步一步に媒介されて非合理的限定が開かれ、またその非合理的主觀的限定の一つ一つの許もとから合理的客觀的限定が開かれる。存在

自体の表象はどこまでも観念像であるから、限定そのものの展開を客体存在の運動や主体存在の実践の模型に基いて説明することは、既に展開された現実的限定を、一つの抽象思惟像に即して再限定（抽象）することを意味する。主体存在の模型の使用は現代哲学の方法である限定の以前にある主体存在、存在の根拠から発する実践は、この限定に隠れて現れていない筈である。これを現し、その上に立ち、自己においてそれを開く道は、主体存在の思惟像を自覚することではなく、却つてこの像を止揚して非合理的なものをそのままに捉え、その許に伏在する合理的なもの（いわば主体の客観）を、合理的なものそれ自らの展開の上へ開き変えることである。これのみが一つの主観を、狭く一面的に限定された実践から、多くの主観を統一し止揚する広い高い実践へ媒介する。

非合理的なものの、感受から想像、意欲への一循環は一つの完結環をなし、更にその環から主体存在の表象が表出されると、それらは一つの封鎖的世界を作る。従つて主観的非合理的なもの、その主体において解決を導かんとする非合理主義は、あらゆる色彩の全体主義を産む。非合理的主観的には、個人、党派、階級、民族、国家等はそれぞれに一つの全体である。各々は、各自に封鎖環を成し、一世界を成す。各々は、各自の思惟、即ち各自の「世界観」を持つ。

自己において完了環を作る主観と主観、全体と全体とを媒介し、それを止揚するものは合理的なものである。非合理的なものは、それ自身において自己を他に媒介し得ない。従つて民族と民族、階級と階級、個人と国家、種族と人類等、これら互に他へ入り込み得ない全体者がある非合理的なもので媒介しようとしても、それはただ第三の全体者を対置するに終る。また部分と全体との様々な関係形態を各々に当嵌めたところで、各々はこの関係を排除（若くは利用）して自らに完結するだけである。だがこれら主観的側面では自己において完結し、世界観と世界観との対立をなす主体も、客観的側面では相互に媒介されている。従つて自己の主観の下に開き

置かれる客観的合理的なものが、合理的なものそれ自らの展開の上へ止揚しやうされてゆくに依じて、全体と全体との対立は統一される。血の神話や国家主義のみが全体主義ではない。非合理的の心魂に抛り、一人称存在の實踐に基もとく如く表象された世界観の中に立つものは、すべて全体主義である。真の全体は合理的なものそれ自らの展開に内在し、その展開の中に実現しゆくにすぎない。

六

合理的でないもの必ずしも非合理的ではなく、非合理的でないもの必ずしも合理的ではない。合理、非合理は思惟上の範疇はんちゆうである。この範疇を思惟を越えた存在の上へ適用することはできない。實踐、實踐世界、現實は、存在上の範疇である。吾々が意識的に、即ち合理的非合理的に、觀念的現實的に取るところの實踐は、思惟の奥に没している存在上の實踐の限定形態もしくは疎外形態である。

吾々は存在上の實踐を意識的に現し置くことができる。しかし如何なる思惟上の根拠によつても、それを伸縮することはできない。それは存在そのものに根拠づけられており、思惟はただそれを限定するだけである。思惟において現された意識的實踐は、常に自己の限界を止揚しやうして隠れたる存在の根拠からの展開を実現する以外に、自己を展開することはできない。この展開を媒介するものは、他の何物にもあらぬ合理的思惟、即ち存在から発するものの客観的、対象的な限定の道である。

説明。合理的なものとはしばしば对象的、客観的なものとしてでなく、むしろかかるものに対する論理または法則の意味で考えられる。この論理からすれば、対象、客観は単に実証的、實在的、感性的、従つてまた一つの非合理的なものとして現れる。しかし、かかる論理や法則は真の合理的なものの一疎外形態にすぎない。即ち、存在の限定としての思惟が、思惟の自己限定として自己を抽象し自立化したもので、かかるものとして論理は自己内に完結し

た一つの全体性をなす。従つて他を排除して自らに世界観をなす。機械論や有機体論、またその論理の世界としての実体の概念はかかるものである。合理的なものをかような論理や法則に限れば、それは非合理的なもの、抽象または疎外として現れ、その抽象性に対してこれを具象化し現実化する試みは、必然的に合理的実体を退け、非合理的なものの中に真に生命ある存在を表象し、非合理的なものにおいて論理を求める試みとなつて現れる。——これが現代的合理主義、現代的科学精神論、現代知性改造論の秘密であつて、行為的直観や絶対合理主義の論から、口ゴスとパトスとの総合としての構想力の論理の説、さては科学的認識の「文芸的」認識への具体化の説等、大旨同じ関心に発するものの如くである。

しかし、合理的なものは元來客観的対象的なものの展開そのものである。それが一定の論理系に合致しないことは、論理一般を越えたものであることを意味しない。客観的なものは針の尖端から星辰宇宙まで總て、吾々に隠された存在を主語に持つところの述語的限定である。客観は常に限定と限定との間の判断関係において展開している。しかもこの判断関係は主語存在と述語限定（思惟）との間の隠された判断関係の限定的な開現なのである。吾々の前に見出される単なる実証的なものは、一定の論理系の外に立つ場合にも、実は他の論理系をなすべき判断関係において見出されるのである。真に論理の外、従つて思惟的限定の外に立つているものは存在そのものであり、現れない無である。論理の抽象性、一面性（従つてまた二律背反性）を止揚することは、非合理的なものへの関係づけにおいてではなく、新しい客観的対象的なものの措定そていにおいてのみ行われるのである。非合理的なものは一定の合理的なものにおいて自己を開くが、その論理を解決しないで、ただ自己をそれから超越させるだけである。即ち非合理的なものは一つの对象的限定、一つ概念において感覺的感情として開き、その概念が他の諸概念へ判断されるところにおいて情緒（美学感情）に推移し、その判断から推理が導かれるにつれて想像、信仰、意欲等の能動的なものに転化し、ここに自己からして对象的なものを限定して置くのであるが、同時に合理的なものを排除して

自己自らにおいて結了せる一つの全体となろうとする。かくて自己がそこにおいて開き出された合理的なもの、客観対象的なものは逆に自己に対して開かれたものとして置かれ、非合理化されて現れ、本来の判断関係（論理そのもの）だけが非合理化され得ないで自己の外に抽象的非現実的な実体界として疎外される。即ち存在は根本的には非合理的なものにおいて現れ、非合理的な活動、実践、創造において開かれることとなり、ここに自分自身に全体をなす非合理的実体（「主体」）の表象が生れる。だが非合理的なものが自己をいかなるものとして措定そていしようとも、非合理的なものの基礎には合理的対象的なものがあり、これはそれ自らの（存在の根拠から発する）展開において非合理的なものを止揚しやうする。——この関係ある故に人間は一つの感情、一つの信念、一つの主観から理性的な説得、自らする反省や客観の対象的観察によって他の主観へ導かれ得るのである。

現代哲学の「主体」概念は、自らに一つの全体をなすある非合理的なものに包摂されて現れるところの一定の客観的合理的なものにすぎない。普遍的に展開する客観的なものの如何なる範囲が客観として残され、如何なる範囲が「主体」としてそれに対置せしめられるかは、全体をなす非合理的者の如何によつて違つて来る。実践主体と客観対象との境界は主観的に引かれるのであつて、全然相対的である。「主体」的实践なるものは、元來存在の運動の主観的限定にすぎない。意欲における実践の基礎には判断および推理における実践がある。後者はその本来的な姿においては客観的なものの展開、変化の全体と一致する。何故なら客観的なものあらゆる変化には、常に一定の感情や情緒が結びついており、これはやがて想像や意欲において実践に発露するところの何らかの「主体」が開き出されつつあることを意味するからである。この「主体」は、それが自覚の上に出て来る場合には、一定の主観が客観対象に対して既に置いている「主体」、「主体」的实践、実践意識（意欲、追求）を変化させる。だが実践即ち「主体」の運動の変化は、それ自身また主体的実践である。実践は普通意欲との同一性において主体存在から発して対象に働きかける運動と解されるが、この意欲そのものからすれば主体存在自身もその対象に働きかけるべく

変化せしめられねばならぬ対象であり、どの範囲までが発する意欲で、どの範囲からが受動的対象かは絶対に答えられない。他面から言えば、どの範囲までがこの実践の客観的制約としての合理的自然必然的運動であり、どの範囲が真に主観的能動として自由創意の範疇を保有するかは絶対に答えられない。意欲における主体的実践の展開として現れるものと、判断や推理における客観的運動として現れるものとは、本来一つのものである。これは存在が思惟の上へ現実する一つの運動の二つの限定、二つの見方にすぎない。吾々は、この存在の運動即ち現実に対して、主観的非合理的にか、然らずば客観的合理的にか、二者選一的に立ち得るのみである。吾々は客観主義、合理主義をとるか、然らずば主観主義、非合理主義をとるかである。第三の立場はあり得ない。現代の哲学は、限定されたものから自己自らを限定するもの（存在、「主体」的なもの、全体）へ、作られたものから作るものへと立場を移すことによつて、この第三の立場を確立できるかの如く考えている。だが捉えられるものは限定されている。思惟が限定し措定したものをもつと存在の原型とか、思惟する主体（思惟されたものでなく）とか考えるのは錯覚である。それは自己自身に全体とならんとする非合理的思惟が、かかるものとして客観的に、従つて一定の論理において措定されたものである。かかる論理が現代の知性として王座についていることは前述の通りである。ある意味でこれは偉大な問題提立者カントの実践理性理念の現代的註釈である。だが非合理的なものはそれ自身存在の一定限定である。それは合理的なもの及び得ない範囲を占有するものでもなければ、また合理的なものを越えて存在自体や絶対的なものに達するものでもない。却つてそれは、それ自らの論理とともに、自らの許に展開する合理的なものの上に止揚さるべきものである。

「吾々」、「主体」なるものは存在するものではない。それは限定された主観と客観とを交互に外延とし内包とする思惟的措定である。存在する主体は主観、客観の奥に没している。「吾々」が主観的自己限定的に、創造的实践的に客観の上へ開き置くものは、それ自身客観的必然的に「吾々」に現れたものである。だがそれは主観的根拠か

らも客観的根拠からも出たものでなく、それを越えた存在の根拠から出る。「吾々」が置くものは、存在の根拠からして置かしめられるのである。存在の根拠は先取し得ない。それは主観的意欲や客観的判断を媒介とし、その述語としてのみ限定的に開かれる。

合理主義、客観主義は往々現実に対する傍観的説明的立場と解され、実践的創造的価値を欠くとされる。だがある一つの現実に対して傍観的であるなしは、主観的な創意に俟つのでなく、存在の根拠に基づくのである。多数の人々が自己の自由から傍観するため存在の自己実現が歪んだり、不発に終る等と考える根拠はない。現実存在の根拠から展開し、そこに思惟をしてその客観と、客観に必然に随伴する主観とを措定せしめずには置かない。ある限定された現実に対して傍観的であることは、他の現実に対して能動的な「主体」として形成されつつあることを意味する。存在が一つの「主体」を疎外して、別の「主体」に開きつつあるときは、前者は自己の創意によって自己の現実を伸展し得ない、否創意の發揮そのものがあり得ない。一つの「主体」において自己を主語化する非合理主義は、意欲するしないに拘らず、自己を存在から疎外し、創意なき無能の立場に陥らざるを得ない。反之、客観の展開の中に解決を見る合理主義は、意欲するしないに拘らず常に、展開する存在の述語となり、「主体」を太り越して行く現実へ自己を止揚しつつ、自己更新的に主体的創意を開くべき立場に置かれざるを得ないのである。

むすび

現代の知性は、啓示または非合理的なものそれ自身の論理となりつつあるものの如くである。だが真の知性は啓示を止揚した理性、非合理的なものを存在と見ず、現実の一定定、単なる問題と見て、解決を合理的なものに見る合理主義でなければならない。

- 『加藤正著作集』第二巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九九〇年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。